

〔甲陽軍鑑品第十一第三十五〕永祿十二年巳の七月中は、信玄公御内談あり、略中其時馬場美濃守より、早川彌三左衛門と云者を使として、内藤修理殿へ、なぞをかけらる、いとげの具足敵をきる、なに、内藤則とかる、小太刀馬場聞て、本手よりは、ましなりとほめらる、是は馬場美濃も、内藤修理も、日來なぞすきにて、如此使の早川彌三左衛門ゆきもとりとともに、鐵炮手二ヶ所負申候、略中十月八日永祿十二年には、信玄公略中一戦をいそぎ度思召候へども、山縣をはじめ、ゆうぐんの八備を、にろねより、志田澤の道へおりて、おしかへり、ちやうじやの首尾あふ事、おそき子細は、八かしらの人数、五千あまりなるをもつて、かくのごとし、然れどもよき時分におしつけ、山縣三郎兵衛備さきのみゆる時に、小荷駄奉行内藤修理方より、寺尾豊後を使にして、馬場美濃守かたへ、なぞかくる、待よひに更行かねのこるきけば、あかぬ別の鳥は物かは、馬場美濃守則ちとく、車牛はなれ牛遣もどるなり、略下

〔三養雜記一〕字謎

大覺禪師即心是佛頌に云、有節不干竹、三星繞月宮、一人居日下、弗與衆人同、節の竹冠を除けば、則即の字なり、星の如く三點して、下に半月をおけば、心といふ字なり、日下と書て、下に一の人といふ字をおけば、是の字なり、弗と人と同すれば、佛の字なり、これ字謎の詩なり、四箇口盡皆方、十字在中央、不得作田字、道不得作器字、これは詩にあらで字謎なり、解て圖字の謎とせり、予かつて和合詩、隱語の類を集め、二卷とし、猜彙と名づく、古歌に、雪ふれば木毎に華ぞ咲にける、いづれを梅とわきてをらまし、といふは、梅字をわかちて詠なり、吹からに秋の草木のしをるれば、むべ山風を嵐といふらん、といふも、嵐字をわかちよめるなり、近來の唄、淨瑠璃の文句にも、百日曾我近松門左衛門作に、言しがらむから糸のとくとにかねぬ下心といへるは、戀といふ字の謎なり、江戸節夜の編笠に、山にも松のみだれ髪といふも、謎にみだれるといふ訓あればなり、今の童謡に、松といふ字は木邊に公キよ、きみ